

北海道の中身を磨く一人材の育成を通して

—国際化を通じた北海道の地域発展論—

1. 概要

北海道は四季がはっきりしていて、豊かな自然環境をもっている地域である。また、日本各地からの開拓団によって新しく作られたところである。各開拓団は当該地域の文化をこの北海道に持ち込んできた。そして、北海道地元のアイヌ文化に日本各地の文化を加えて、「独特な日本式移民文化」はこの自然に恵まれている北国で形成している。

このような人文と地理上の特徴を持つ地域は、日本でも世界の中でも極めて珍しい。その一方、観光などを基幹産業とする北海道は多くの外国人に来てもらうために、北海道全体の国際化も求められている。その中に、中国人監督による『非誠勿擾』の上映と洞爺湖サミットの開催に伴う中華圏の観光客・投資家からの最近の北海道人気などの効果を考えると、今後中国人との触れ合う頻度が高まり続けていくことが期待できる。また、日中間のビジネスと技術交流などの機会が増加することによって、北海道における中華圏絡みの国際化は、産業・経済・文化など幅広い範囲で広がっていくことが考えられる。

このような現状を踏まえて考えると、活気のある国際化した北海道作りは必要となってくる中において、北海道と中華圏の国際交流はどのように進んでいくべきだろうか。私は、今後の北海道を中心とする国際交流は、北海道の内部の魅力を増すことに重点を入れるべきだと思う。北海道地域の変革や活性化につなげるような活動を行うと同時に、それを担う人材の育成に取り組むべきだと思う。つまり、他国や他地域に貢献するような国際交流を行うと同時に、北海道の中身を磨くことに力を入れるべきだと思う。

本論では、中華圏がらみの国際化の北海道作りにとって必要だと考えられることを提案したい。要点一、日中交流のイベントを設定し、日中の現状を把握し、責任感の持つ北海道の若者を育成することである。要点二、中国文化を重視する中国語教育体制作りを通して、(中華圏に対して)理解力のある北海道と、(中華圏に)理解される北海道を作ることである。このようなことを通して、北海道の農業を含めた北海道と中華圏との経済上の提携を促進し、観光業の発展によって、北海道地域における就職率の向上と地域の活性化につながる。つまり、北海道の将来を担える人材を育てることによって、結果的に北海道の自立的な発展と持続的な発展に結びつくことができると考えられる。

2. 次代の北海道を担う人材の育成—中国での体験を通して—

昨年、中国は10%GDP成長率をキープし、輸出入ともに堅調な伸びを見せ、世界経済を牽引するエンジンとして国際的影響力が高まっている。その一方、北海道の自然資源を含めた中華圏とのビジネス提携関係がますます深くなってきた。同時に、北海道の基幹産業である観光業にとって、中国人観光客を迎え入れるかどうかということが観光業の発展に直結している。このような現状において、忍耐力を持つ、日中の現状を把握し、自ら道を切り開くことができる北海道の次代を担える若者の育成は必要とされている。

しかし、今の若者はこのような重荷を背負うことができるだろうか。若者全体の特徴に関する富良野塾が閉鎖した時のある評価を見てみたい。「小さい頃からモチベーション至上主義で育てられ、かつ自分を磨くことすらせずに社会に出てきた若者が、覚悟や教養がないのは当然でしょう。何でも与えられ、何でも準備してもらい、手取り足取り導かれ、(恐らく勉強くらいしか)自らの達成感を持たない「受身」の若者が、状況の中で忍耐したり、その状況を自ら切り開いたりできないのは、当たり前ではありませんか」。

確かに、これは国と関係なく、モチベーション至上主義で育てられた子供達の共通な特徴である。そして、このような子供が次代を背負っていける人材に育つには、中国との国際交流を利用して、中国の貧富の差を体験させ、それに対して自分ができることは何であるかを考えさせるのは意義のある国際交流ではないかと思われる。つまり、子供達のことを考え、子供達に苦勞させたり、困らせたり、我慢させたり、本を読ませたり、闘わせたり、悲しがらせたり、立ち上がらせたり、切り開かせたりするイベントの設定などを日中交流の一環とする。その結果として、北海道の将来を担える人材の育成に結びつく。

3. 中国文化を中心に中国語教育を行う

(1) 趣旨・目的

今後、北海道の農業と農産物を含めて資源の利用等に関して、中国とのビジネス上のつながりが深まっていくだろう。また、観光業も長期・中期・短期などのような形で中国人の観光客を受け入れる体制をますます完全にする必要があるだろう。同時に中国の社会制度と文化思想等を知る必要も出てくる。したがって、中華圏との相互理解が求められている。これに合わせて、中国と相互理解しあう北海道の国際化を実現するには、中国文化を中心とする中国語教育方法を提案したい。また、要点一は、中国文化を重視する体系的・専門的な中国語教育を目指すことである。要点二は、中国語・中国文化教育は、北海道道庁をはじめとする北海道の経済団体と観光機関及び教育機関の協力とリードのもとで、北海道全域において計画的・統一的に行う必要性を示すことである。

現在、北海道における中国語教育¹はブームとなり、広い範囲で行われている。しかし、北海道の将来像を考えると、それは決して完全なものだとは言いきれない。今後の北海道全域の良好な発展の実現には、少なくとも次の2点からの改善が急務ではないかと思われる。

その一、北海道全域で中国語・中国語文化教育を行うことを企画すべきではないかという点である。つまり、北海道全域の活性化につなげるには、小規模・地域・組織ごとに中国語教育を行うことは必要であるが、北海道全体の今後の発展を考えると、全域において計画的・統一的に中国語教育を行うのも不可欠だと思われる。また、この点の改善には、ビジネスではなく、教育の一環として、道庁と経済団体および教育部門などの関連部門のリードが必要だと思う。

その二、中国文化も体系的に取り入れるべきではないかという点である。それは、違う独自の生活習慣や倫理観、社会制度を背景に持つ中国、いわば、未知の文化の土壌を背景とする人間と円滑なコミュニケーションを実現するには、文法正しい中国語のみでは足りない。つまり、中華圏との建設的な交流を実現するには、中国文化を中国語の応用に生かすような教育のあり方が必要不可欠である。また、結果として、観光・経済・文化など各分野の人材育成につなげることが考えられる。

このように、「(中華圏に対して)理解力のある北海道」「(中華圏に)理解される北海道」を作ること为目标としたい。そして、北海道と中華圏の間の円滑な対話関係を作るために、相応しい中国文化・中国語教育のあり方について提案することを本企画の主たる目的とする。尚、本企画は、中華圏との経済・文化・産業における連携を強化することによって、北海道全地域の活性化を図ることから、札幌地域を中心として事業展開していく。

(2) 中国文化を重視する教育の必要性

異文化間の対話を円滑にするには、自在な言語運用能力のみでは考えにくく、理解力と柔軟な思考力及びその背景の国際的な教養が不可欠である。それは、言語は、その国の独自の文化を背景とする産物であり、その文化圏の価値観、歴史、社会のあり方及び思考法などと根源的に結びついているものであるからである。また、望ましいスタンスとしては、日中間文化上の差異を背景とすることを理解した上で、その一方で、自分と同じ人間として「個別的に」付き合うことだと思われる。

具体的な実話を挙げて説明する。ある日、知り合いと一緒にタクシーに乗った時の出来

¹ 本企画での中国語・中国語文化教育は通訳の育成なども含んでいる。

事である。さきに降りた私が知り合いの話を真面目に聞かず、自己主張ばかりだと運転手さんはそう捉え、知り合いに伝えた。しかし、実はかなり信頼できる方なので、私は真剣に聞いた上で反応したのである。では、このような誤解が生じた原因は何であろうか。

考えてみると、次のことが原因ではないかと思う。私は日本語を流暢に話していたかもしれないが、その一方、日本人のように頻繁に相槌を打つ習慣ができていない。また、タクシーの中ということもあり、知り合いを見ながら会話することが出来なかった。それに、相手の話に対して率直に意見を述べる前に、日本人にとって不可欠な「そうですね」「おっしゃる通りですね」のような「前置き」がなかった、という3点があげられる。このように、習慣の違いによって、目上の知り合いに対しての言動という小さな出来事から、まだ若い私が「礼儀知らず、傲慢で教養のない、無礼な中国人だ」と運転手さんは見なし、これを中国人に共通な特徴だと強調していたそう。

これは私的な場面なので、摩擦が生じずに済んだと言えるかもしれないが、その影響を考えると責任を感じた。更に、これは公的な場面なら国際規模のもめ事の種になるかもしれないと考えると、自分の不勉強で申し訳ないで済ませるわけにいかないだろう。それに、知り合いに教えてもらわなかったら今でもそれに気づいていないだろうと思うと、ますます自分の無知に恥じている。

もう一つの日中文化の相違によるコミュニケーション方法上の相違を見てみよう。来客に対して、日本人は「ご用件は何でしょうか」と尋ねるのは普通である。それに対して、中国人は「誰を探していますか」と聞くのは普通である。日本人からみると、中国人の言い方がきついではないかと思われやすい。このような聞き方の相違を生じた原因は、相手の行為などに対して、日本語の習慣は直接に触れないほうが望ましいのに対して、中国語の習慣はそれに直接に触れたほうが明瞭であるからである。このように、このような小さな言語習慣の相違の背景には日中文化の相違がある。そして、このような文化上の相違を体系的に中国語教育に取り入れないと、文法の正しい流暢な中国語を教えることができるかもしれないが、円滑なコミュニケーションの実現に結びつけるかは大きな疑問が残る。

このことから、言語教育に文化知識が必要不可欠であることを再度痛感した。また、日本で11年近くも生活し、長年言語研究と教育を行ってきた私には、このような現状の何かできるかを考えてみた。そして、北海道に定住し、中国語・中国文化教育に取り組むことを中心にして、北海道と中国の双方に役立つように一生をかけて、微力を尽くことを決心した。

(3) 北海道全体で計画的・統一的に中国語・中国文化教育を行う必要性和その利点

北海道全域において計画的・統一的に中国語・中国文化教育を行うことは、すくなくとも次の 5 つの利点があると考えられる。また、これは長年の通訳、中国語教師の実経験による。特に北海道に来てから、j i c a, j i c e と北方圏センター等での通訳経験及び富良野市役所での仕事の経験などによるものである。

まず、地域や組織の要望に応じて、「相応しい」「信頼できる」人材を提供することができる。現在北海道広い範囲においては、中国語・中国文化教育及び中国との関係作りのサポートが必要とされている。その中に人材不足のことで困る地域も少なくない。例えば、素敵な観光地である富良野には、中国語・中国文化教育に携わる人材と中国との関係作りをサポートする人材のことで困っていた。また、市役所が主導する外国人を起用する体制がまだ完全ではない。現在富良野市役所をはじめとする富良野地域全体の努力で、このような部分を少しずつ解決してきた。その過程を見て、三つのことが分かった。一つ目、人材に困った原因は、富良野に人材が集まっている大学がないことと、中国人関係の組織がないからではないかと思う。今後北海道の更なる発展に伴って、このような地域が増えていくことも予想できる。二つ目は、信頼できる人材を提供することが大事であることである。三つ目、個人に頼ることも必要であるが、そこに一つの組織がないと、対応できない場合が出てくる可能性が高いし、新人のため情報の収集と現地に慣れるまでに時間がかかるという弱点もみられた。このような現状と将来のことに備え、北海道における中国語・中国文化教育は地域ごと行うとともに、計画的・統一的に行うことがより効率的だと言える。

それから、質の高い中国語・中国文化教育を提供することができる。国際化の北海道作りには、質の高い専門的な中国語教師²が必要不可欠である。その一方、現状において、多くの中国語教師は専門的な語学知識を持たず、必要とされる教師の資格或いはそれに相当するものを持っていない。初級段階においてはこれでよいかもしれないが、今後に備えるなら専門知識の持つ中国語教師が必要とされる。そして、北海道道庁と経済団体と教育部門と観光などの関連機関の協力があれば、日本語教師の養成と同じように、現場で働いている教師をはじめとする中国語教師の養成も実現可能となる。また、定期的に教師間の交流を行うなどを加えると、中国語・中国文化教育の効果を高めることになるだろう。その結果として、北海道は中国に対する理解力を高めていくことになるだろう。

それに、北海道各地域の建設的な提携関係を促進することが可能となる。北海道の各地域の自然環境などにおいては差異が見られる。ただし、特に将来を考えると、各地域は共

² 本企画は中華圏との交流に対するものであるため、他の言語の重要性を認識しているが、それを触れないことにする。

存共栄関係であるが、競争関係にあるわけではない。したがって、中華圏との提携において、地域ごとに自立的な企画が勿論重要であるが、北海道道内地域は互惠互利関係を築くように、各地域の提携が北海道全体の発展にとってより望ましいと考えられる。そのため、この仕事に携わる人間の知識を含め、情報の公開・共有及び相互的に協力することが求められる。北海道における中国語・中国文化教育は、計画的・統一的に行われることによって、各地域の建設的な提携関係を促進することが可能となる。

さらに、人材の確保につなげると思う。今北海道全域において中国語のできる人材の人数と、どのレベルにあるか及びその配置は把握されていない。日中間の交流あるいは国際会議などが行われる時、人材に関する資料が提供できない。よく聞くのは北海道では優秀な日中通訳がいないだろう。そして、ハードの環境が十分備えている北海道はこのようなソフト的な原因、つまりそれを担える人材不足という原因で開催地の候補に入りにくい。開催地とされる場合も、東京から人材を調達することが主である。その反面、北海道には優秀な人材が確保することに努力が足りない。そこで、北海道における中国語・中国文化教育は、計画的・統一的に行われると、このようなジレンマが少しずつ解決できよう。

何よりも望ましいのは、人材を通した商機などを有効利用することができる。裏返して言うと、人材が北海道にとどまらないことは北海道全域の活性化にとってかなり不利である。それは、北海道道外に住んでいる人より、道内に住んでいる人のほうはもっと親身になって北海道のことを考えるからである。このように、北海道全体において、計画的・統一的に中国語・中国文化教育を行うと、人材の有効利用につながる。その結果は北海道の活性化にもつながる。

以上のことを考えると、北海道全域において、現在の中国語教育各機関と各組織の力をあわせた上で、計画的に・統一的に中国語・中国文化教育の体制を作る必要もある。また、北海道と中華圏の経済・産業・政治・文化交流を担える人材を育成し、さらに将来に備えて人材の構成の状況などを把握して管理する体制を作ることを目標とするべきである。また、この目標のもとで、北海道の現状に合わせて、中国人の習慣や好みなどを取り入れながらおもてなしの中国語教育から入手することが急務ではないかと思う。

参考文献

<http://crawtaroblog70.fc2.com/blog-entry-98.html>

<http://www.nrc.or.jp/>